

できないだろうか。これがしばしば倫理の過信に陥る危険をもつものである。かくて倫理は政治の下に従属してもいけないし、政治の上に君臨することも現代の社会においてはできないとすれば結局政治そのものの中に倫理を生かして行く以外に道はないと思う。倫理は政治を通して価値を追求し政治は倫理を通して自覚する所に倫理と政治との生きる現代の道があると思う。ここに倫理のイデーと政治のイデーが相互声援し合って行く必要があると思う。

## (6) むすび

現代の教育においては幾多困難な問題が多いがすでに人間像の平和的理想像についてふれたから最後に更に次のことを加えてむすびとしたい。

現代教育における人間像は、現代人の無力感を克服して真に社会の形成者として、社会を創造する意志の人でなければならない。現実の所与の社会をただ上手に自己のために利用して社会をいわば上手に泳ぐだけでは教育の何の目標にもならないと思う。即ち人間形成の目標は誠実と意志の二大根本力に自己を支えつつあるべき社会の良き形成創造の主人公たらんとするところにあると思う。

## 世界史低学年履習についての所見

光 谷 音 吉

去る8月、文部省主催によって開かれた、指導者養成講習会の時に集められた資料にもとづいての調査が報告されているが——正井寛三氏——、それによれば、社会科各科目の選択状況の内、普通課程では、全日制・定時制をあわせて120校のうち、世界史の履習を欠くものは、僅かに1校であり、職業課程の106校中では、12校となっている。しかも全日制普通課程での世界史は、95校中85校が5単位を考えており、必修教科としての新社会を5単位で履修させようとしているのは、100校中61校しか示されていない。この数値によって、世界史が高等学校社会科の中で、その准必修的性格と内容とが、多数の学校や指導者から期待され、重要視される面を如何に多く持ちあわせているかを印象づけられるのである。

観点はいろいろであろうが、とにかく、それだけの期待と必要性とが認められている世界史を、一体どの学年で履習させるのが最も妥当であるかについては、各県、各校のそれぞれの特長事情もあって、さまざまな問題点があるに相異なるが、本校としても、昨年度までに、改訂の趣旨を考え、一般社会が社会として内容が整備された事や、中学の社会科、特に歴史的分野の内容と時間などの面を判断のより所として、一応、第1学年で必修という線を決め、諸般の準備を進めた。

前記の調査中、さらに別の面を眺めると、社会を1年または1～2年で履習させようと試みられているのは、90校中61校も示されており、世界史第1学年履修は、その大勢からは、いささか遊離したような結果になってはいるが、ともかく方針通り、本年4月から実施して来た。今、約半歳を経て、いろいろ考えさせられる点もあり、その効果などについて

ては、生徒たちの学習能力、効果と忘却、大学受験、他の社会科との連り、などの面を含めて、かなり先へ、反省と検討が持ち越される点も多いし、今、早急にこの試みの功罪についての論を進める資料にも不足するので、それらの点についての資料は次第に整えることにし、取り敢えず、この稿においては、

1、著手に当ってあらかじめ配慮した面、その他

2、学習途上とくに気づかれた実態

などについて反省を試み、次年度以降への足掛りにしたいと思う。

## I 初学年履習のねらい

初学年に履習させる事が妥当であるかは前述のように、いろいろの問題点が重なってくるので判断に苦しむ所であるが、そのより所とした点を一、二あげてみたい。

### (1) 中学の社会科と意識

中学における社会科との関連性を考えてみると、中学では大体その歴史的分野は、日本史を中心として7:3の割で世界史的な事項が取扱われるように試みられているはずであるが、実際は殆んど補足的学習に終わっているようである。——後述する1年生対象の調べでは、大半が約9:1ぐらいであるといっている。——しかし、その学習を通じて、かなり世界史的に物事を考えよう、理解しようとする深い関心を払っているようである。

中学3年の段階における歴史的意識と理解度は、相当進歩をみせているようであって、信濃教育研究所、斎藤氏の調査にもとづく和歌森氏の見解によると、中学3年では、その生理的年令、心理的發展の度合やその学習経験から、すでに“昔”の意識は問題でなく、りんごの生産高の変化というような一経済現象についても、歴史的因果関係をもって与えられたグラフの数値の変化を理解しようと試みているものが100%をしめ、さらにまた衣料入手の問題では、70%に相当する者が入手が容易になった理由を、単に、機械や技術の向上というような直接的な見方だけからでなく、その社会・経済の発展という、間接的な立場から解明しようとする意識を働かせている。と述べられている。さらに加えて、このように、ある事象を間接的立場で因果関係をとらえようと試みる生徒には、それを行うに十分な抽象的概念の理解と能力の裏づけがあるはずだ。と述べられている。

高校へ入るまでの間に、成長したこの歴史意識は、改めて、まとまった内容と豊富な時間の中で、世界史を履習することによって、新しい興味の中で、過去の日本史や社会の履習事項を上手にまとめようとする彼らの新しい依り所として、十分な役割を果すものであろうと思われる。しかも、今後の、より詳しい日本史の研究や、社会、人文地理などの学習に、新しい素地として、別の意味で、その理解度を深めるのに効果的であるに違いない。

### (2) 一般社会の文化単元の趣旨

従来的一般社会における文化単元は、われわれの生活をどのようにして文化的に向上させるかという所に重点をおき、次学年以降の諸教科との関連を考えて、巧妙に仕組まれながらも、多くの人たちは、その趣旨だけに賛成して、中途半端な学習領域であるために、多くの東西の文化事象の中から、そのねらいを満足させるため、一体、何をえらび出し、どう配材すべきかと、非常に苦しめられて来た。改訂を機会に、名目的には、この文化単元は

姿を消したようであるが、その趣旨とねらいは、十分に生かされねばならないのではないかと思う。現在及び将来の日本にとって、世界との密接な結びつきは、極めて重要な問題であって、国際的友好関係の円滑な持続のためには、正しい人間的知性と、正しい知識に基づく科学的判断が、如何に大切であるかを深く理解し、数多い過去および現在の世界史的諸事象の中で、一体、何が文化の向上に役立ち、われわれの生活を飛躍させて来たのか、また、如何なる場合に、同じ人間の活動が逆の結果を招き、生活と文化を犠牲にして来たのかをはっきりと知り、ささやかな一人一人の努力が、明日への道を開拓してゆく主体であるとの自覚を深めてゆくことは、何をおいても、文化單元にかわり世界史が果さねばならない第1の役割でなければならぬと思う。

### (3) 新社会と世界的視野

新科目の“社会”が掲げている目標の中に、社会科学の成果にもとづいて、現実社会の諸問題を、科学的・合理的に理解し批判していく能力や態度を養うことが示され、それらの理解に必要な要素としての“世界的視野”が強調されている。また、同様なことは、中学の社会科の目標にも明示されて、極めて重要視されている。この場合、勿論、われわれの当面する現代社会の諸問題を、狭い視野からでなく、互いに動きつつある各世界との相互の関連性を注意深く眺めながら理解を深め、世界の一員としての自覚に常に立脚しなければならぬことを示しているのであるが、同時に、それら現在の諸問題発生の根底に横たわる、過去の歴史的事情も客観的に理解を進め、その発展成長の過程における因果関係を物的にとらえると共に、人間相互の間における意識的連関性についても、われわれの人間観を通して批判し、理解するように努力しなければならぬことを示しているものであると思う。この点は従来的一般社会の中においても示された所であり、一部の内容の変革を除いては、その根本的なねらいは決して変わったわけではない。

世界史の履習を新社会に先行させたい理由の一つにあげたいのは、実にここにあるのであって、従来もそうであったように、人を豊かにするための一つの制度や機構の理解のためには、是非その歴史的発展の経過を、その時代の社会的・思想的背景の中で了解されねば、主題の中核にふれることのできない面が多くある。

例えば、最初にとりあげられている政治單元の中では、まづ民主主義の基本的原則が如何なる経過の中で成長して来たかを了解することなしには、政治や法や道徳は理解されて来ないであろうし、経済單元の中では、まづ如何なるしくみの中で経済生活が進められて今日の姿が生み出されて来たかを確認することなしには、当面する経済の諸問題についての中核に触れることはできないに違いない。そういう意味で、自然経済、採集経済、ギルド、中世都市、座、荘園経営、問屋制度、マニユファクチャー、交通の発展、通貨、綜画運動、重商主義、植民地活動、重農主義、自由主義経済思想、農業革命、商業資本、産業資本、産業革命、カルテル、トラスト、コンツェルン、帝国主義、世界恐慌などの諸事象についての基本的概念は、発展しつつある当時の社会を背景に、時代観、関係人物観などの知識に基礎をおいて、よく理解されて来なければなるまい。とくに、イリギスの産業革命や資本主義社会の成長などについては、広い視野の中で解明把握されて行く事が必要であろう。更にまた、労働單元においては、労働分化の発生経過、古代の奴隷制、中世の農奴制、徒弟制、革命後の近代的労働者の発展と社会主義思想などの展望を離れては、学習

が成立って来ないのではなからうか。

勿論、これらの事象についての学習は、新社会の中でできないというわけではない。問題点について、それぞれの立場で、直接的変化の狭い発展史が扱われるよりは、一つの時代の流れの中で有機的に理解させるように試みられた方が、断章の単なる集積にもならず、限られた学習領域としては、あらゆる意味で有効であろうと思うのである。従来1学年で一般社会を学んで来た生徒に2年で世界史を教えて、常に感じて来たことでもある。そのため、世界史の学習中のある適当な時期に、それぞれの問題点を念頭において、まとめて、縦に流れた発展経過と、横の連関性を確かめるように配慮された時間をもつなら、十分にその効果をあげることができるに違いないと思う。例えば、政治や権力の構造などについては、18世紀の西欧を一応学習し終った時に、アメリカ独立革命とフランス革命を依り所として、過去にさかのぼって、それらの特質を要点的にまとめて理解するように、作業などの学習を通して、短時間に指導し、さらに新しく出発する近代民主主義の成長の経過については、第二次大戦の終了と共に各国家間における特質を眺める事を怠らぬようにすれば効果があると思う。経済単元や労働単元などについても、世界史の中で、古代的性格や中世的身分制が十分に学習されてくるように配慮し、同じ意味で、産業革命が学習された時、前後のまとめに考慮を加え、それ以後の諸問題については、19世紀のイギリス社会の自由主義的傾向や、社会主義思想発展の立場を克明にとらえながら、各国独自の運動の具体的展開を、同主題のもとに、若干時間を加えてまとめ添えられてくるように準備するとか、また、18世紀以降の国際紛争の諸経過の中で、革命以前と以後では、経済的背景というもの、国家間の動きに如何なる役割を果すに至ったか、などについて特に関心が払われるように学習を進めたいと思う。そして、戦争終了後の現在の政治や経済などの諸機構、機能などについては、新社会の中で、それらの問題毎に重点的に広く補足されながら学習されて行くよう配材する方が希ましいと思っている。世界史指導の立場から考えると、新社会の分野へ、不足し勝ちの現代の諸事象を委ね得る可能性も多いのではないかと思える。

## II 中間報告

かなり気には掛りながらも授業を始めて約半年、1年生の気持も、自分の方も一応の落付きを保つようになって来たので、11月中旬、生徒は一体どう思っているかを、次にあげられたような若干の質問に対し、無記名で答えさせてみた。——生徒は1年生、約160名であり、授業の内容や教材の取扱い方、使用教科書（高等学校世界史、好学社）も従来通りとした。従来、3年と2年を対象に授業を担当して来たので、それらとの比較という意識が最初から強く、ことさらに、低度に話を切りかえるという程の事もなく進めて来たつもりである。ただし、地図や年表の取扱いについては、特に気を配ってきたが、1年生だけに、相当考慮しなければならぬ点が多いことに気づいた。紙面が許せば後述したい。——

### ● (問1) に於いて

“ 中学で一般社会や日本史などを学んでいた時、世界史の流れの大要がはっきりかわっていたら、よく理解できたはずだと思いますか。 ”

という問に対して

(a) 思う

99

- (b) 別にそう思わない 40
- (c) 同じだろう 16

という数が示され、18世紀まで学んで来た生徒たちではあるが、大体ねらい通りに、世界史の役割を考えているように思える。

• (問2) では

“中学の社会の時間中に、世界史的な事柄をどの程度学んできたか、歴史関係全体を1とすれば、どの程度になるか。”

という問に対して、

- (a) 全然やらない 21
- (b) 1～2ぐらい 115
- (c) 3～4ぐらい 19

という数字があげられて、大体中学においては、殆んどまとめて学習されて来ないようであり、これと関連して次の問では、

• (問3) “中学の社会にひきつづいて、高校でまづ世界史を学び始めたことについて、どう思いますか。” というのに対し、

- (a) 有意義だと思っている 78
- (b) わからない 44
- (c) 外の教科の方がよい 33

となって、かなり多くの生徒が、効果的であると反応を示している。(c)の答の中では、その理由として多数の生徒が、日本史をもっと詳しく学べば、中学のそれに直接続いているので効果的だといっているのが注目された。

• (問4) で、現在の理解力についてたずねたのであるが、

“教科書の内容を理解するのに精一ぱいである” と答えていたのは、18であって特殊な本校の生徒層を示しているようであるが、そのためにも低度にならぬように意識されて進められてきた授業に対して、

- “説明の語句や内容は普通の調子であって理解できる” 64
- “難かしい事が多く、困難を感じている” 24
- “難かしいが理解できる” 41
- “もう少し詳しい方がよい” 9

などが示されている。大いに努力はしているのであろうが、大体、自分で納得できる状態にあるようだ。学習成績も、そういう意味で1年生らしい真剣味が加わっているせいも、大学入試的様式の5つのタイプの考査についてみても、相当の効果をあげている。参考までに表示してみるとつぎのようになる。

第1問——与えられた年表(50年毎に区切った線)上の点と、与えられた中世史の主要事項を組み合わせる。(30点)

第2問——短文の正誤判別、理由付記の型で西欧中世を主体に10題(20点)

第3問——古代インド史について文章適語完成法(30点)

第4問——短文の解説2題で、上中下の三段階に分けて採点

第5問——メルセン条約を図示説明させ、

8・5・3点に分けて採点

第1問の成績

点	1~10	11~20	21~30
人数	11	36	112

第2問の成績

点	1~5	6~10	11~15	16~20
人数	6	24	65	64

第3問の成績

点	1~10	11~20	21~30
人数	2	27	130

第4問の成績

上	中	下
68	73	18

第5問の成績

上	中	下
52	78	29

これは単に一回のテスト結果を示したにすぎないが、自分としては指導上の細部の技術その他の面においては、十分に反省を要する箇所が多いことも考えるのであるが、一年生に世界史を履習させることが、いささかも理解度の点で心配はないと思っている。(ただし、今後の忘却と入試への影きようは別にして。)ただ、特殊な作図能力などの点では、見る事はできるが作ることは中々容易でないようだから、機会ある毎に、興味の裡に画かせるように運ぶ工夫を積みたいと思っている。

しかし、また、反面、生徒がこれだけの成績を示すためには、彼らとしても相当身にこたえる努力を払っている事を見逃してはならぬと思う。

- ・“試験などのためにどの程度に努力し、時間を割かねばならぬか、国語、英語、生物、数学などを各10として示せ”

という問に対して、10以上の数字をあげているものは国語(132)、英語(78)、生物(136)数学(81)であって、国語とか生物以上に負担のかかる教科となっているのも実情であろう。また、

- ・“何を覚えるのに時間を要するか”

については、年代—59、人名—23、事象の内容—22、事柄の背景—43、のようになっており、数多く現われてくる事柄の整理が大変なようである。だが、

- ・“現在は他教科にくらべると、いろいろの面で難かしいと思うので、2年から3年で学んだ方がよいと思うか”

という問に対して、

- |             |    |
|-------------|----|
| (a) 思う      | 45 |
| (b)今のままで十分だ | 78 |
| (c) わからない   | 32 |

となっていて、非常な努力が伴うが、それなりに十分に理解も可能であり、有意義であることを認めて学習にいそんでいるのが、彼らの実態であるといえよう。

• “大学受験の教科として意識しているか”

- (a) 意識しながらやっている 10
- (b) 全く意識しない 59
- (c) 時々思うことがある 36

にみられるように、1年生という環境は、殆んど生徒が大学受験を3年後に控えているが、それには意識的わざわざをうけることも余りなく、その点で、基本的ねらいも十分に満足させながら、思い切って効果をあげるように仕組まれて行けるのではないかと思える。

以上、若干の調査を通して知られる学習の実態をあげたに止まったが、新しい彼らの関心に応え、努力を効果的に結実させてやれるように今後、さらに検討を重ねて行くようにしたい。

なお、参考のために1年生の世界史の成績が学業全体に対し、如何なる相関関係を示しているかをつぎに掲げてみた。

	U	-5	-4	-3	-2	-1	0	1	2
V	X	54	59	64	69	74	79	84	89
	Y								
-4		45	1	2	2				
-3		55	1	2	2	3	2		
-2		65			4	5	7	3	
-1		75		1	5	10	9	7	
0		85			3	10	17	16	4
1		95			1	6	6	17	11
2		96						1	

X……学業成績平均点

Y……世界史成績

R=0.41

## 世界史と他科目との内容上の関連

小 倉 幸 春

### (一) 社会科社会との関連

社会科世界史と社会科社会との間には、内容が重複し共通するものが少なくない。しかし社会においてとり上げられる世界史的事項は、体系的でなく、その目標からは副次的、補